

東京教区 礼拝音楽 NEWS

第2号

2020年9月6日

編集・発行／日本聖公会東京教区 礼拝音楽委員会

reihaiongaku.tko@nssk.org

「礼拝理解」という視点を、当委員会はこれまでの各種集会・研修会で大切にしてきました。

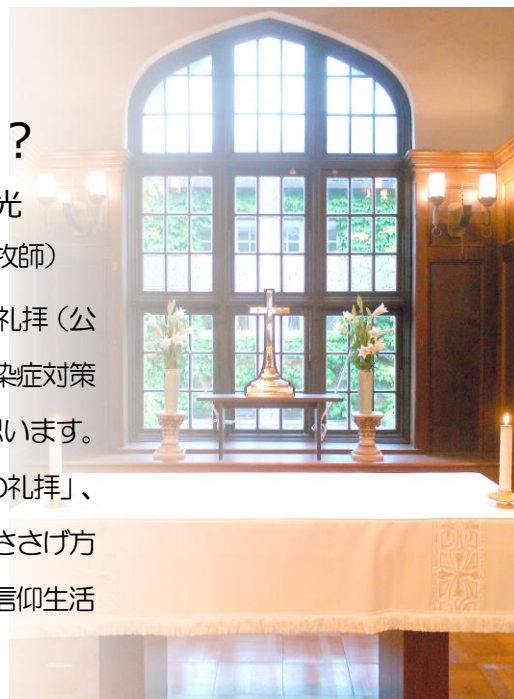
今号は、コロナ禍においてそれぞれの状況の中で行われている様々な“礼拝”を、改めて見つめます。

どのような礼拝をささげますか？

司祭 宮崎 光

(立教学院チャプレン、聖パウロ教会管理牧師)

いまだかつて経験したことのないような世界的な危機の中での「礼拝（公禱）休止」という傷みを抱えつつ、各教会はその再開に際して、感染症対策の入念な準備、そして、どのような礼拝をささげるか熟考されたと思います。そこで今、日本聖公会が式文として定めている「聖餐式」、「朝夕の礼拝」、「み言葉の礼拝」、この3種の特徴や意味を紹介します。礼拝のささげ方を考えることは、この危難の時にも各教会が確信と決断をもって、信仰生活を積極的に深める絶好の機会になってゆくとおもいます。



聖餐式—最後の晩餐から続くキリスト教礼拝の伝統

「聖餐式」は、主イエスが「これを行え」と弟子たちに命じられたあの「最後の晩餐」が起源です。「パンとぶどう酒」を「キリストの体と血」として分かち合い、その「聖なる食卓」に連なる人の輪を2000年以上に渡って掲げ続けてきた、教会の存在意義を表した礼拝です。誰もが集められ、み言葉に養われ、共に祈り、聖餐によって一つに結ばれ、それぞれの生活、社会へと派遣されるという構造です。

しかし、コロナ禍にあって、「聖餐に与る」ための近距離の接触と飲食行為が危ぶまれています。命の糧である聖餐を受けるために、不安や怯えを抱える必要があるでしょうか？そこで、改めて「霊的陪餐」という中世スコラ学等でも論じられてきた教えの習慣は助けになるでしょう。実際には飲食（拝領）しなくても、「信仰と愛をもって、望みにおいて、キリストとの交わり、神の恵みを受ける」ということです。また、聖公会の聖餐についての一つの考え方として、かつて陪餐の言葉（分餐語）に、「信仰をもって心の中にキリストを食らいて感謝せよ」とあったように（1938年版『祈禱書』より）、過度に聖餐のパンそのものを神聖化しません。物理的に「パンを口にするか否か」ということ以上に、心の中にキリストをいただくこと、そして自分自身の心をキリストにささげることが、今改めて大切にしたいものです。

(次頁へ続く→)

朝夕の礼拝

—修道院的な礼拝を普遍化した「聖公会の宝」

「朝夕の礼拝」は、16世紀のイングランド宗教改革において、1549年に発行された『第一祈祷書』の「マティンズとイーブンソング Matins & Evensong」という式文以来、ほぼ同じ構成で受け継がれてきたほどに、極めて完成度の高い、聖公会らしい伝統的な礼拝です。それは修道院のみで行われていた、一日に7～8回の祈り（聖務日課）を、信徒が誰でも参加できる、朝と夕に行う礼拝として、「詩編」「賛歌」「聖書」「祈り」で構成されています。

「朝の礼拝」を、現在の『祈祷書』の順序で見てください。「聖語」（短い聖書の言葉）から礼拝は始まります。「懺悔と赦しの祈り」を皆で唱えた後、「主よ、わたしたちの口を開いてください」との司式者の呼びかけと会衆の応答句からなる短い唱和で、賛美の時へと招かれます。「詩編第95編」と「その日の特定詩編」を用いて、主への賛美、感謝、祈願などを表します。そして「2つの聖書日課」（旧約聖書と新約聖書）を聞き、それぞれの朗読後に「ザカリヤの賛歌」、「賛美の歌／万物の歌」などの賛歌をもって応えます。「説教」、そして「使徒信経」によって、信仰を確認、宣言します。「献金（奉献）」などはその後に行うことができます。続く「祈り」は、まず「主の祈り」によって心を整え、伝統的な短い交唱による祈願（連禱）に導かれて、特禱（その日の祈り、平安のため、恵みのための祈り）、その他諸々の祈禱を適宜行い、結びの祈り（祝禱）をささげます。豪華にも簡素にもできる、大聖堂でも家庭でもできる、大人数でも一人でもできる、日々の祈りの実に機能的な形式と言ってもよいでしょう。

ただ、聖書朗読箇所は2年周期の日課表で（3年周期の聖餐式聖書日課とは異なり）、毎日行う礼拝

としての性格がありますので、教会の主日礼拝としてささげる場合は、聖餐式の朗読箇所と詩編を採用することも考えてみてください。

み言葉の礼拝—み言葉を祝う宣教志向型の式文

日本聖公会では2006年の総会で承認された新しい式文です。司祭が不在で聖餐式が行われなくても、会衆が聖書のみ言葉を中心に共に祈り、感謝と賛美の豊かな礼拝をささげられることを意図して編成されました。とくに主日の聖餐式聖書日課（旧約聖書、使徒書、福音書）を味わい黙想できるように、また代禱が重視され、世界のため、全教会のために祈ることを意図しています。今この時にあたっては、司祭がいても、積極的にこの式文を用いてもよいことが、教区主教によって認められています。その構成は、聖餐式の前半部のようにもとらえられがちですが、本質的に、教会の構成員の主体的な参与による「宣教伝道志向型」の式文と考えてよいでしょう。聖餐に「与る人」、未受洗ゆえに「与れない人」の区別はないからです。

「ともに集う」：式の始まりとしての唱和、悔い改めの祈り、そして賛美（詩編95編、大栄光の歌、等4種から1つを選ぶ）、特禱と続きます。

「ともに聞く」：3つの聖書朗読箇所と詩編、説教、使徒信経、平和の挨拶、献げもので構成します。

「ともに祈る」：代禱とその十全なる補完として「主の祈り」で結び、感謝の祈りを加えます。

「主とともに行く」：結びの祈りと派遣の唱和をもって散会します。

そこで今、できないことではなく、

できることを大切に

「集うこと」、密です。「歌うこと」、危険です。「触れ合うこと」、危険です。「共に食すること」、危険です。「聞くこと、音、声、言葉を聞くこと」、可能です。「祈ること、静かに、沈黙して祈ること」

と」、可能です。わたしたちに今できることは、「聞くこと」と「祈ること」。これを積極的にとらえ、大切に向き合ってみようではありませんか。感染リスクを極力回避するための所要時間制限もまた、礼拝の検討、選択の重要ポイントとなりますので、その中で、静かに、ゆったりと、豊かな主日礼拝の時を皆さんでささげられるならば、今この時からの「新しい礼拝生活」の豊かさが展開されてゆくことでしょう。このピンチをチャンスに、変えてゆきましょう。

今号では、北海道教区報『北海之光』本年5月号より、広谷和文司祭（旭川聖マルコ教会牧師、稚内聖公会・留萌キリスト教会・深川聖三一教会管理牧師）の巻頭言を一部改編の上、再録させていただきました。

広谷和文司祭は2012年「聖歌集を歌う会」の講師として、「アイオナ共同体とケルトの霊性」について、ご自身のアイオナ島修道院での体験をもとにお話くださいました。北西スコットランドのアイオナ島を本拠地とする超教派の信仰共同体で、牧師ジョン・ベル J.L. Bell とグラハム・モール G. Maule を中心に多くの聖歌を生み出しています。『聖歌集』巻末の作詞者・作曲者の索引をぜひご覧ください。彼らの手になる多くの聖歌が収録され、この『聖歌集』のひとつの方向性を示している、とも言えます。104番「世のはじめに言があった」、178番「望み絶え果てた」など…歌ったことのある方も多いと思います。

ベル師は、このコロナ禍に際して新しく“We will meet”という聖歌を創作されました。様々な思いが渦巻く現状で、歌が生み出されていくことに心を動かされます。そうした聖歌はきっと、いつか私たちの力の源となっていくでしょう。

日暮れて 闇深まり

司祭 ミカエル 広谷和文

イエスが亡くなられて3日目の夕方、二人の弟子がエマオへ向かって歩いていました。先の見えない不安の中を故郷のエマオへ帰ってゆく日暮れは何とわびしく、心細い日暮れであったことでしょうか。ところが、この二人にいつの間にか、もう一人の旅人が加わりました。宿屋に入り食卓に着くと、この人が用意されたパンを裂き、分けてくれたのです。二人の弟子ははっとしました。それは、一緒に生活している間、イエスが毎日繰り返された姿であったからです。この人こそ復活されたイエスなのだと分かった時、その姿は見えなくなりました。イエスは、二人の弟子が生きる希望を失っているとき、彼らに近づかれ、彼らと共に歩んでくださったのです。イエスが共に歩んでくださることによって、「二人の目が開け」、「心が燃え」ました。

これまで多くの方がこのエマオ途上の物語によって、慰められ、励まされてきました。その一人にヘンリー・ライトというイギリスの牧師がいます。病弱のライトは、二人の弟子がエマオへ帰っていく夕暮れと、自分が見つめている人生のたそがれを重ねて、美しい聖歌を作りました。聖歌31番です。

日暮れて 闇深まり
慰めも失せ去りて
よるべなき身の頼る
主よ ともにやどりませ

私たちも人生のたそがれ、人生の終わりを迎えます。エマオ途上の物語は、そのような時にも、復活のイエスが共におられるというメッセージに他なりません。ウイルスの脅威におびえ、「闇深まり」ゆく時代にあって、この福音を命の支え、魂の拠り所として生き抜こうではありませんか。

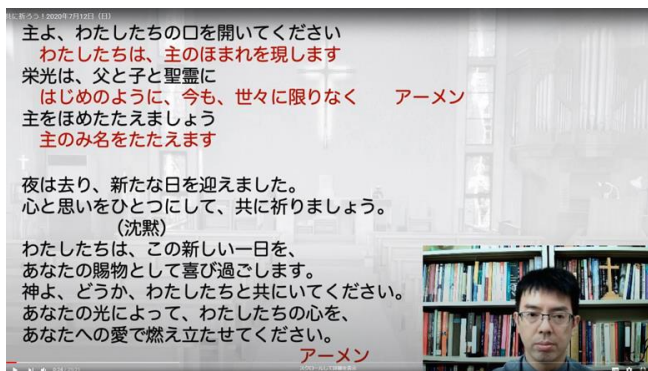
聖マーガレット教会のホームページから

今井俊博（礼拝音楽委員）

聖マーガレット教会も約4か月の間、公禱を行うことができませんでした。緊急事態宣言解除後、どのような感染対策の準備をしたうえでどのような形で礼拝を再開するかを委員の中で相談し、7-8月の毎主日にはなるべく密にならないために「朝の礼拝」を3回行うことで礼拝を再開いたしました。

当教会のホームページでは従来から教会の活動についての紹介をしていましたが、公禱を中断することになり「教会の様子が判らなくなる」という声に応え、一般的な広報だけでなく信徒に対する連絡や繋がり意識を保つための大事なツールとして発信内容を充実させてきました。主教教書をはじめとする連絡・情報等を適宜アップしていますが、礼拝（公禱）停止期間中は毎週主日、自宅で「み言葉の礼拝」をできるように式次第と日課等をアップするようにし、また「牧師より」というページではイースターメッセージ等の内容をアップしました。

（聖マーガレット教会 Youtube 動画より）



「共に祈ろう」



「音楽の贈り物」

さらに5月からはYou Tube チャンネルを立ち上げ、「共に祈ろう」と題して牧師の主日説教を動画で配信し、それに加えて教会員有志による「音楽の贈り物」として聖歌や器楽演奏の動画を定期的にアップしています。聖歌を歌う機会が失われて、歌いたいというストレスが溜まっていることもあり、耳にするだけでも癒されるという声もあり、公禱再開後も「主日説教」と「音楽の贈り物」の動画は、しばらくは継続してアップしていく予定です。

ご高齢の教会員の中にはネット環境にアクセスできない方も多数おられ、連絡事項等は郵送も必須なのですが、ネットによる広報の重要性は今回の新型コロナの事態で益々明らかになったように感じています。

『礼拝音楽 NEWS』次号（第3号）は…

- ◆教役者に聖歌のこと、お聞きしました
- ◆リレーエッセイ オルター奉仕者と祭色あれこれ（ほか、11月初旬発行予定です）